

伝道所の庭で秋風に吹かれ、何気なしにB.ディランの「bowin' in the wind」を口ずさみ、耳で覚えていた英詞にハッとした。「何発砲弾が飛ばば撃つことをやめるだろうか。友よ〔答え〕は風に吹かれている」。

ディランよ、もっとはっきり言えば世界は、「bowin' in the timidty wind/臆病風に吹かれて」いるんじゃないか。だから、あなたの時代も今も、砲弾を、実際にか、脅しに使っている。

「神は、おくびょうの霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊をわたしたちにくださった(Ⅱテモテ 1:7)」。私たちが吹き抜ける霊(風)は、臆病風(霊)ではなく、力と、愛と、思慮分別の霊なのだ、と。

日本政府のように親分の顔色をうかがい、甘い汁は吸って苦い滓を沖繩に押しつけるのは、臆病風に吹かれるままの姿。

私たちは、愛と思慮分別の風(霊)を背に受け、その力で臆病風(霊)を押し返したい。

「～武力によらず、権力によらず、ただわが霊によって、と万軍の主は言われる(ゼカリヤ 4:6)」。

人間が恐れる時、易々と権力にすり寄る。暴力的な手段だけのことではなく、あらゆる局面で人間を支配する経済、権威、ブランドなどの世の諸力にすり寄っていく。

「わが霊」とは、力と愛と思慮分別の霊。「おくびょうの霊」には愛と思慮分別が欠けていて、虚しい幻想の力だけがある(Ⅱテモテ 1:7)。

旧新聖書のどこでも、「恐れるな」という言葉を拾い出せる。それほどに人は臆病風に吹かれている。「恐れてはならない～あなたたちのために行なわれる主の救いを見なさい(出エジプト 14:13)」、「神に依り頼めば恐れはない。人間がわたしに何をなすえようか(詩篇 56:12)」など、枚挙にいとまがない。

私たちはいったい何を恐れているのだろうか。恐れ之源は、第一に「死」であろう。そして第二は「人間」ではないのか。敵対者を恐れるだけなら分かりやすいが、家庭や教会内での親しいはずの関係も恐れになろう。SNSを四六時中している若者は、友人や仲間たちを恐れているかのようだ。

「おくびょうの霊(Ⅱテモテ 1:7)」、「臆病風に吹かれて」いる状態とはどのようなものか。

「弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた(ヨハネ 20:19)」。

敵に対する防御というだけでなく、疑心暗鬼に己自身を閉じ込めている状態だ。こんな私たちの、あるいは私自身の真ん中にイエスは立ち(20:19)、念を押すように「あなたがたに平和があるように(20:19,21)」と語った。

「平和」とは、「武力によらず、権力によらず、ただわが霊による(ゼカリヤ 4:6) 愛の風(霊)に吹かれること。それからイエスは、「彼らに息(霊)を吹きかけて言われた。〔聖霊を受けなさい〕(ヨハネ 20:22)」。

イエスが吹きかけた息は、「力と愛と思慮分別の霊(Ⅱテモテ 1:7)」。臆病風に吹かれている者を目覚めさせ、復活したキリストの霊(息)が吹き抜けていく。

人間は、人間を恐れて幾重にも武装している。私たちが頼りにするのは武装や権威ではない。愛に満ちたキリストの息(霊)こそが私たちの力なのだ。キリストの永遠の息は、第二の恐れ要因「人間」だけでなく、第一の恐れである「死」をも凌駕する。

ディランは「友よ〔答え〕は風に吹かれている」とくり返し歌った。

まったくそうだな。聖書を読んで備えたら、鍵を外して扉を開け、風に吹かれて答えを探そう。それが臆病風でも、愛の風でも。



《おまけのひとこと》

愛の風が臆病風を押し返す ある時には その二つの風が混じり合い 異次元の味わいとなった
ゼンマイや豆モヤシを掻き混ぜると ビビンパという別世界が開けるように 臆病風は人間の何か

